関ヶ原軍記 二編 九 三十

へ遠13
2207
30

門へ逸13
特
帙 2207
巻 90

牛込 池清

関ケ原軍記武編巻之廿九

目録

一 金吾秀秋大谷の陣を裏切の事
并秀秋大敗軍の事
一 金吾脇坂朽木秋月等大谷が
為ゑ再度敗軍の事
并関東の大軍大谷吉隆を取巻事

徳川十五代記　編
開明小説 鳥追於松實録 十五 大尾
琢説 夜嵐實記 全
近世 松村春輔著 櫻田實録 全
書物繪入 貸本所

春雨文庫
近世記聞　編 敵討 笹野權三代記 全部十五冊
明治太平記　全
参考肥長 鹿兒嶋士傳　編
此書たるや出軍士卒の日記或は戦地より歸京せし探偵人等の説話を因り西國証討の始末を詳細なせる第一の實録なり
近世小倉青木實記　全部　近日出来
這は徳川家の旗下青木貢太郎小倉藩長臺昌枝熊じ等春情の事奇暴借強談の悪事青木の奥方難難心苦を記し實録の名紙綴りたれば近世の珍書なり
東京牛込細工町
誠光堂　池田屋清吉謹白

牛水入
池清

関ケ原軍記或篇巻之廿九

金吾秀秋大谷の陣を裏切の事

并秀秋大敗走の事

既に関ケ原にて彼方此我
ちがいするとき大谷刑部少輔
吉隆をば皆裏切ゆへ

雑賀人押寄せ鉄砲を打ち戦ひを
なすむる人もなく
深田秀家と福島正則とは今新
より生死を幸とす合戦の志実
中之中鴻巣近き井伊本多
と戦ひ鴻ヶ峰新十郎と度
堂と戦ふ是又実中なり小西
行長岡細川山内と戦ふの

うちに石田鴻津ヶ丘物見押
出し戦ひなりふいなりく
志賀の強ひ是ある達者なる
武者　徳川家北沢籠本多
来りなりこれ本多猪ありり
しが馬なり乗りて紀
御前こ幸りて只今い戦ひ
実中こそは差くお景れどく

金吾殿のうち切り紙束ねおく
〔以下〕狼煙二度揚げ潟芝今ふ
行の海法も野〻敵墨方はあや
知を親〻山条えんげ紙向つ
く退散〻中へ〻中上
りり
行で金吾が肉度公事百てて
秀枝ちもぐ〻ふ討果さべー

とのー　上意なり出陣ゆて
きりて　御前ちち秋陣
ふ帰りて今朝より二三度戦
ひ手負る軍勢ゆ〻
ふ人六百人ち虎臣ちる
是程を配りて雲尾山へ押る
ありさ毎ちに雷光の京中
をちるがざと〻武雲万人な

勝れたりされば[illegible]金吾は此大
軍を事ともせず鉄炮を打掛
家手に小勇英速しき本多
ありける手金吾秀秋は本
多の鉄炮手かしこも揃へれば
さすがに切むすべきも覚悟
なく朽木脇坂秋月の三将は
調ど合せ一万五千余人静く

とゝのへ扣へありして三人
兩へも軍伏をとめおく処
いまし大谷がそなへへ手押寄り
はるかに送り我陣をさして堅
とこの忽扣あげ真黒よりろ
く大谷が小勢のそなへへ押
包るまでそのうしろ湯浅ゑ
まつさく吉隆に告る手大谷

い大剛の良将にして世にもも
稱ぜられ今ここに也金吾秀秋
が別紙を業くしるしとして
たるふ証の事ありべきや皆く
ものれこと下知して日ごろ
用意仕る人数より三拾目迄
此筒を以て見物せ
立るべし筒先に成拵へ

ものに平塚因幡守 戸田武蔵
守は右手結ゝ切る
ゝ此近寄ると結をしり
金吾度の軍を大谷が志げ
まりをすると絡るゝん
と此時押寄
見傷ぐりもし小勢を
しり大谷を敵をあり寄り

引付一時許ゆき居まりて間の
こゑ絶えしむかしの弦地絶
并出ぬ何かうらぶくたちくべ
き源矢を一つもるりけるを去
ぬおりて手をつかつの
者に弥がしこ并教されり
この時秀秋の軍兵に鉄炮こ
并立られこくるぞ

るこくこそ始めこの尋
刑部少輔を耳をかけ今
まくぐ敵ぐこの人馬共あ喜
震動せしにぐこそ
こぐまりこくられひつぜく敵こ
敗軍共形ちこくこりこの俗ふ
永く粉骸時を揚利ちて
このこくこりこそ邪とすべ

きや立ちて強を入るるを
麾と打ふる手ぞ大谷刑部
北条氏政 池沢 古川 佐久
間 長林 木村 鈴木 鈴木 門屋
どつと打ひく矢いでしり
に武雪安ぐ紀ありさまも也
既に敗軍北条氏政士
ぞ一度ふるひ返ぞ敗走せ

秀秋 ちこと見て敵を見ぐ敵を小
勢なり返しに合せて掃蕩せよ
と下知するといなや走りあるる
大谷刑部 ずして逃ぐ逃さば
ぐる討先きべきなりさま
も戦うんとするもの一人も
なければ秀秋 そ飛ぐ籠
のまを走りぞぐるるきやや

大将を去りぞ給ふぞや
とてこれ見るとえの
松尾山へ人をぞ遣はれを案じ遣
はるると大公が軍兵ども若林
八左衛門先手
城討ぐ人の山陸ると時
しきりせるを走り遣はれと聞を
ひろふ大軍此者を立てる夏

るれば出べきもちく松尾山の
えの陣所より公方をもして
引退ぐ見苦敵軍あり
このせり去陸下知して急手
兵士を引庭しね
金吾 秀秋 朽木 赤坂 大公
が為に乗安敵軍のう

英雄豪傑の大軍大谷吉隆は元亀の
頃より秀頼中務大輔　朽木河内守
秋月長門守おのゝ〳〵ある
きを度々引きたれども日暮くも
強人と知りつゝ強情なるべし
〳〵切腹嘲はけるまんも弱き
ありさまの〳〵関東の人〳〵

るんれんんぐ〳〵おのゝてと
向けべきや又大谷事
勝利しるゆへ定めて油断
なりんさらば引返して討果さ
ばしと大医に云く返して
強を入れんとる大谷見つて
それゝどの軍令なるべきや
と云く用ゆ形れを平

塚関情ゆる三百騎人を率て敵の
ふせぎを防ぎ接合より鉄炮戦
打掛て追来らんと欲大谷
ゆ籠本よりも鉄炮を打かけ
除ぶるを敵いていくさを始
め又柄本秋山お退て
られて討ての武百余人を
実初秀秋敗軍ひせり大谷

うへ討ちうしなへる数三百余級
敵合を数五百余級のうちを討
ちうの内ちを捕ちる元人
を山ぶ山ぶ山ぶ大谷ゆ軍
吾も百余人討ゆふを吉陽
下知して見やう金谷ゆ今の
敗軍をとりぶりまを退寄
を城をあて来るべ一生見極

きべーさて平塚周情ち先陣
して生所きこの二の目をあて待
うけする風情きまるゆく良ねと
いつてこのせり金吾秀秋
き実物と級軍して参ねんく
ゐひ実来の人くを知らきん
も弱きちうきとひ敵きき
鬼神ともせるの小勢ゐりゐふ

ゐどのゆうゐんと下知あん
べ金吾の軍士布目新平田
中勘左衛門きさをとうけ物
軍間のこゐ地揚く大谷が陣
をおうけしり吉隆下知
て敵きおづ狂病神の光ざる
うちを退ひくげせて鉄炮
一ト通り打をうんが大谷が侍

當尺岡中　義林　中小路　上野
遠岡を始めとして弐百余
人鉄砲入り又横合より
平塚岡橋を戸岡武蔵守も
鉄砲を入れる秀秋手ごめに
及軍をはじめ
へ手うちとおと覚悟
大谷勢を追ふ夫より事付申
お戦の重なる軍なり
びく打木　秋俣　脇坂等此
岩ヶ丸百余騎　大
谷ヶ手此りの　彩又百余人
うれくのこ　加
手ゑり　ゆりと
戦ひをいどむ　合戦
の軍勢も又　敗れて

二三里引きゝぞきぬ大谷下
知していまやこれまで
ちりまぎれ軍色はあつの見
ゝて急引しるゝ中やりく
武者百騎ばかり雑兵三百
人ばかりぞ平塚
戸田の森ゝ左右りけり氏
せり平塚寄りて吉隆ふや

ゝいは実説も近身はされ芸
今一戦ひい冥途の土産ゝ行る
ぞとさいく吉隆ゝりて
何をこの世ゝ遺恨ふく
和のまぶ絶れども実朱乃
新手来ぐこゝ今一度
手荒く戦ひきゝり
ゝゝさぶひ新ゝも合せて

三百余人なりしかども敗走
の時　関屋公より以下
知行をとりあつてとゝの大公
地をもたせられるとして
軍使をその所迎へんの法大将
手おくれとりつく度度
高虎　細川忠興母義の先手
をもつとめて元和
ぬ元和の合戦中納言秀秋
方へ入り余人へつゞひとく打来
河内守　秋月長門守　新坂中
勢を博多へ帰ぜり
加藤河内守も父子ともに
其手をもつめて江方八面手二万
余人を以て元和元年攻戦
んと決大名をのゝもと

如し元経寺の宝物
北軍ありて行程も敵軍の
勢の至る所を面白くれと誓
らく床机を腰掛け迄をも
して居たり事なり 池清

関ヶ原軍記二篇巻の九終 池清

池清

関ヶ原軍記武篇巻之三拾

目録

一 大谷吉隆実説の事
并湯浅久助敵勢を討破つる事
主人吉隆の首を隠す事
一 長堂仁右衛門 湯浅の頼を義務
する事

并仁右衛門 大助の首級討取事

池清

関ヶ原軍記武編巻之三拾

大谷吉隆家臣の事

并湯浅大助敵勢を討破りて

主人吉隆の首級隠せし事

曰く大谷刑部少輔吉隆を湯浅

九郎左衛門うちもらして

湯浅大助うち取て

遂云敵 自害せ

時年又十六才なり近代の良将
なりて却むべき人なり家人
い殘らず死絶て前板大谷が侍
三百余人なり湯浅入道い主人
の首をとらく院堂仁右衛
つるの所へ来りて入道が首を
ゆるす
云書よりいとく虎を画くく

るるに却りて猫く類なる
ものなりと世人のことわざ
皆那此ごとくなれば絵く
ことを身べきなり何度
なりても実物を写すべる
時き十ぶん仕負わせべし
と思ひ切る人きき有り
きとへば法慶は書古り

をりをしるすこの流義は
極めて名人よ如なるべしと
こゝろ手初りといへ共略書
同じ事斗りいとゝもつゝね
の形の中に極も深く
きでとゝめこれを世話こゝろ
を法大成の基ひとを見て
如意と叫ぶゆゑなり

絵を画くに手虎を出んと
形のごとく筆勢画く
如りて猫のごとくよの如
世話を細工を何をもとゝ
為ぬる手大板をを割るとゝ
ひるがゝしく割て
細く割る丈にそい板をを
るゝばかりせんなよ

さるゝいつの又おさく加て
耳ゝゝゝ仕舞いやうするゝいつそのゝ
ぎゝの戦ゝ一本まるゝ
ありとゆへたゝこれゝ世上の
美男ゝゝ
如くゝゝ
親ゝ者をゝゝ

なんでも者切をべゝと思へ
共二三日すぎると手法りに
ちつゝく面白くしく
隠くゝゝ高ひ年
ゝる時いはゆい金銀ゝ
ゝ下してゝ長慶ゝ
をして行張りゝ加べーと
色を身てゝ精をいでゝ

元亨に生涯拵えて
無精といふてあるべきと
ども有るべきこと
して拵ゑ元亨に失ふ
又元金を不拵しても拵
ゑ元利ゆり実初百分
の時の心底をいつまでも
崇きゆゑ拵ゑ度おもふ

ふれ加拵ゑる変
ひ合の戦の
事に郷と年そひ人の
生死有之事中
悔きゆゑ何ゆ
うきゆゑ不妻問の変
出来不来るの前ゆり
れ虎を画く

打ちひらく猶ふ数ありける源
義朝中なり大谷吉隆を実
朝の長坂事を申されける
物語りつるも吉隆を
いと尤も合手能くかりつ
とり

去程に大谷吉隆を安房の戦
ひ手に成の大将討ちく

今は強手九十三騎にて取り囲
りの大ものを手負手落手
を五ケ所七ケ所完負ざるその
ちからつくしたりける時の
用ふる立雑しに時に刑部少輔
吉隆大音声に呼ぶ汝ら源氏
敵の手を逃るべ逃うず
討死をすべきなり又秋首を兼

いひ分ありしごとく湯漢の両院を
ばかりの数今南部のありさま
いかゝあるべきと天明年間ごろ
湯漢のうちなれば水くに東
急度堂 細川藩の金吾 秋月小
倉田中 朽木 紀伊 南部 徳田一
家の籠城三百余人の軍勢
をもつて夫国むかひ戸田平塚

の軍勢徳田の手より籠城の手
見へ中さだめとなりうちかゝる
ゆえ彼軍勢紀州の援兵の
掲げ大会ゆ小勢見へ奥方城
吹鳴しつゝ
る刑部少輔
天下を統べ定まりて
内府公代となるこれ天命

ありさま折節ひとの床机にうちとり
掛形ばかり踏ひしぎ重箱を引寄て
小猫共を片手ふり振りて秋生
滝の仕業をうらめしく思ひ
を西ひてゐるばかり猫は鼠を
一念生霊り恨をいかに食中酒云
千有との一言ふくく板十文字
ふ掛切り湯渫ふくく手ちを掛ん

又助を帰時分命猶して今い
今ハ色男一世主人吉隆の首
地蔵物千色毎夜代中年
篤と入て立いで敵切掛ん
ゆ迄方を見るに集ハ軍兵
九十猪のりのぐもうをく討死
きまりうり今ハ主人の首地
持ち出る湯渫又助が道案内を

さべーしてこの声をなげて
させるまさしたるさむ士
を古川右京亮 若林八郎
下河辺 牧野三左衛門
池沢七郎兵衛 佐久間勘右衛
平手清左衛門 ものども
さしてて手負ひ粉ぐく
に死を極め結さしたを拾へく

和は陣より出でて掛け金のる篇
の馬乗りて金吾るれ人
乃遠云を省くべくとく
秀秋の軍云方を方金人の中へ
突入く武雲も手ぐもく
べくとく敵を
遠くちぐふをこれを
うて秀秋が軍云方も大きふ

ひぐみ果てくもらきあびくと
いへたるに九拾騎のそんども
追ひ来りこの所にて一騎を
のこしぶ討ふせ川湯
流大助を首を毎衣れ中ふ入を
く雑兵おどろ城の内ひ城
を一騎八幡毎衣を風く
ふ三号柄の鎧を馬

の乗りそそ手うちけく九十
騎ばかりより風のそつまるゞ
さ〳〵矢いでより馬に七才の
男髪ばるこを奇人をるを以
くうみるのものきんぺんく
紙向の敵を城三騎家臣し
て矢面るこの人小田隠一刀剣
力みて走英雄の士るが

うけちぶ〳〵遠来の旅をそぎ
手厚けく〳〵その強雷あへく
あるる人なりしの時中納言
秀秋を大谷と討手つげ勝岡
城あまて討るるを実検する
手実初友友のたるひよりて
級軍をるとい〳〵芸大谷が実和
のいくさ手庵竟の武先百三

拾余人城討死れば手軍功抜
群なり迷籠前回を揚りを
主と知りぬ郎〳〵く湯流を助を
主人の貴を隠きんと結方城
足出て彼方はお考〳〵
に堅らむひの回く松原の
繁るる平山あるる谷ろり
山回ありて友方北山後来く

はるゝ泉山あり山にて鄉濁り
居るといふこれ石示沛の下り口の
山なり一里ばかりなり
このところより
夢うゝ見くざれむ能事增不可
ところ〻より
馬を組させ
ゆるゝ見るゝ谷を登る奥此田の

中ゝ蔓蒲生茂り清水流れて
音高くゝ新宿ゝの所の
海岡の中ゝ院ゝゝゝゝゝゝゝゝ
橋ゝゝ大雪ゝ湯流れ
ども高ゝ須ゝゝゝゝゝ
主人の離ゝゝゝゝゝを得
ゝゝゝゝゝ樣ゝ腰ゝ拭く
ゝゝゝゝゝ眠り居ゝり

夜堂仁右衛門　湯殿の教を
承ける事
并仁右衛門　大物の貢を討ること

夜叉夜堂佐渡殿　佐渡の味噌を
捨てし　夜堂仁右衛門　ちこ
十文ほど　仕事　庵麦の武
士なりしが　庶民　玄蕃を討

じふる　新七郎　命にて　仁
右衛門　高麗人　手ごろも
ぬくとうて　物もとうとう　大
ひそいもく　紙屋　と見也ふ
彼湯殿　大物　ゲ　前日をとると
足届けるあさ　毛子　細ゑべし
とて　又大谷ゲ　貢地院　しる
地足くるを　庵　大事なりる

に下人殺拾の又左衛門と
共にて一人お繕ひ仁右衛門
と又助が武者振を見るに甚
形勢の人にて大石の
士兵眠りしるに奇ひるれ去
を起してゐむづるべし
とてそろ〳〵寄り寄り獨
此身相の意不を見届して

一殺寄迎んぐりげこれ痛手と
を逃れるに此身自分
此殺を兵眠りしるに手遠
く物びしり又助を目をもき
の殺の柄此片手振りて
放さんぐ仁右衛門も寄しるまり
まて同じく殺をとるまんぐ紫
此大ると押身をり時の

棒持の又左衛門は刀抜うぢら
して首を討んと走り来る武
人助急度足
う郎新さ紀ら働らうざるい
なで者り有てのみちりと
左りの手をさのべく抜ろ
ら有し様子をとらけ引ぬき
まれたその也又人斗りも

岩もとく小山のごとく紀つどれも
様地所手をとし又左傷つ手るげ
ゆるみで又左衛つを源四郎
却迎まれく金弾弥ぐ波の
中こ入てもぐるい足へぐ抜れ
ども四の中は皆どろ也く手
を刎ふつがぶ形くゆりくと
波の中よりおりてとびて

辛苦いのちを仰うけ
候年仁右衛門氏者を元として家
の長として西川又右衛門と名乗
せられ此時仁右衛門大あんをく
後人第らい知ねど素性
を分りかねる実説に概為
をのこさるべき根拠なく只今
隠されたる貴き大

物の貴殿様ん我家に帰
中べきなり後ろんやらくを
大助氏時りもしる絵を太刀
も抜出て若者ら今い見を
あり家を元に功名せよ
我をこれ大谷刑部少輔が家来
ふ湯浅大助といのるを
も 内府公ふも御ねの知

りのあり叔父主人吉隆は首
をば深く隠せども和あり侍へ
ども生度を彫むるあり表れ出
首の有所をば稿使も彫むこと
遠慮せられるこの和あれど
家を又彫むるあり理をつく
してやはり義堂仁右衛門大別
の者にて一度ぶるる武人歩ず

何ともあらんあれもあんく
なるるまで哭けり生度
の遺言はぐく吉隆度の首を
ばかく又吊ひもとべき
ありと更合られを助大きふ
ばんでさんべと力振りて
我家をを捨てさんとし
る時仁右衛門とえうけいやく

湯漬などを冷貧に成るゝ迄太刀
打して勝負を決せらるゝ
のゝしりゝこの時又助を仁
右衛門尉義武者と
されば至ゝ武者とも
勝負せんいでく
この時又助を見懸て仁右
衛門を負ゝ毛阪仁右

なりゝども長太刀代を
打ぬむ中へ
まぐれを切
の左りに
ぎりゝ
仁右衛門
貢城ゝ
をば三人手
長太刀代を
うづの志甲
服の上
にあり一ぢん
げゝりこの時
ぬんで又助が
自分代を
掻ひて血漬り

とも又助が首をうばひ去り
毎夜麓とも不申候へく又左
衛門地獄の中より引いづ
湯治がるを生捕して生馬よ
りの生日の申れくて
ありて　閑斎公の御本
陣へ参り申へき虎の子く
出くるを物語りて左

湯治が貢地高
を見と見くを手柄を称美
し即刻言葉を用意して
閑斎公の御前に出でりけり

池清

池清